The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈環境〉を足下から考える ： ケースとしての〈ゴミ〉
Author(s)	臨床哲学環境分科会
Citation	臨床哲学. 2009, 10, p. 125-140
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5834
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《研究ノート／ワーキングペーパー》

〈環境〉を足下から考える～ケースとしての〈ゴミ〉

臨床哲学　環境分科会
（家高洋／岡辺裕美／樫本直樹／小菅雅行／辻村修一／深田千晃／和田健太郎）

目次

０．　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126

１．　活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128

２．　〈ゴミ〉から考える ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128

２－１．　労働

２－２．　メタファー

２－３．　感情

３．　〈ゴミ〉を考える ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・133

３－１．　ゴミになるもの・ならないもの

３－２．　快適さと秩序

３－３．　「Re」を考えなおす

３－４．　「捨てる」ということ

３－５．　名もなきゴミ

３－６．　メディアとしてのゴミ

４．　結びに代えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139

0．はじめに

〈環境〉は臨床哲学のテーマでありえるか？これは常に環境分科会に突きつけられている問題であり、私たちが常に念頭に置いている問題である。

臨床哲学研究室が発足した当時から、〈環境〉は臨床哲学が扱うテーマとしては考えられていなかったように思われる。少なくとも多くの関心が向けられてこなかった。それに対し、〈医療／看護〉や〈教育／対話〉といったテーマが中心的に考えられ、現在でも臨床哲学を特徴付けるテーマであり続けている。しかし、医療や教育について考えてさえいれば臨床哲学になるというわけではなく、「臨床哲学とは何か？」という自己規定は未だ明確にされていない。何を扱えば臨床哲学になるのか？どのように扱えば臨床哲学的だといえるのか？この問題を考えるための一つのアプローチが環境分科会なのである。発足当時には想定されていなかった〈環境〉に取り組み、臨床哲学のテーマになりえるのかを考えることは、臨床哲学全体の問題でもある。

その環境分科会も今年で三年目である。そろそろ、この問題に答えたい。これまでの二年間の活動を通して分かったことは、〈環境〉や〈自然〉を考える場は日常の場面とつながりにくいということである。哲学カフェを取り入れた自然観察会など、市民を巻き込んで環境について考える活動を重ねてきたが、自然観察会はどうしても非日常の場であったし、環境について考えている人たちの中に入っていくと、環境を護りたいという明確な目的意識に引っ張られ、哲学的思考に結びつきにくかった。そこで今年度は「足下から考える」ということをキーワードにして、より生活に身近な〈ゴミ〉に焦点を当ててみることにした。その成果がこのワーキングペーパーである。先の問題に、大手を振って「環境は臨床哲学のテーマでありえる！」と答えることはまだできなくても、少なくとも〈ゴミ〉は臨床哲学で扱う意味があるということを示すことができると思う。

さて、環境分科会の紹介とワーキングペーパー執筆の背景はここまでにして、ワーキングペーパーを書くにあたっての私たちのスタンスについて説明したい。私たちは環境分科会でありながら、〈ゴミ〉を〈環境〉だけの問題としては扱わない。より正確に言うならば、環境問題の一つとして語られることの多かった〈ゴミ〉を、〈ゴミ〉そのものとして一から考察するということである。環境という従来の枠組みを外して〈ゴミ〉を中心に据え直すことで、環境についての従来の理論が取りこぼしてきたであろう点が見えてくる。〈ゴミ〉という個別事象には、個別事象であるからこそ含む広がりや豊かさがあるのだ。〈ゴミ〉

を中心に据えるという視点の転換によって、それらを汲み取ることができるということが、臨床哲学が〈ゴミ〉を扱う意味である。

私たちはこの視点の転換を、鷲田の言葉を援用して「イグザンプルではなく、ケース」(『聴くことの力』p.108 参照）と呼んできた。環境問題を考えたいということが先にあって、その「イグザンプル」として〈ゴミ〉という個別事象を検討するのではなく、〈ゴミ〉という個別事象を「ケース」として扱い、そこから考察が派生してくるような「臨床の場面」として考えたいということである。それゆえに、〈ゴミ〉は環境の部分ではなく、むしろ環境が〈ゴミ〉を考える際の一つの切り口に過ぎないのである。

ここであらかじめ断っておきたいことは、この環境分科会の活動およびこのワーキングペーパーが、決して何かのニーズに応えることを目的や出発点にしていない、ということである。ゴミをめぐる現場の問題解決やゴミの削減を目指しているわけではない。そうではなく、あくまで臨床哲学が〈ゴミ〉を扱うことによってどのような視点が出てくるのかを提示することに主眼を置いている。

以下で、環境分科会の今年度の活動報告をし、それらの活動をもとに環境分科会が議論してきたことを各論として項目ごとに分けて論じる。各論は大きく二部に分かれている。前半の「労働」「感情」「メタファー」は、それぞれが既に問題関心として独立しているもので、これまであまり〈環境〉や〈ゴミ〉と関連づけられることのなかったものである。そういった問題群を〈ゴミ〉から見ること、領域横断的にそれらの問題群を捉えることを試みた議論である。それに対して、後半では、〈環境〉や〈ゴミ〉に深く関連しているが、私たちが議論を重ねる中で、今までにはなかった仕方であらわれてきた論点を挙げた。つまり、注意深く〈ゴミ〉を考えることによって見えてきた論点である。

もちろん、私たちがこれから行なう考察で、〈ゴミ〉をめぐる議論の全てが汲みつくせるわけではない。「労働」「感情」「メタファー」だけが、ゴミから考えることのできる領域ではないはずであるし、ゴミを考えることによって出てくる論点は無数にあるだろう。この考察が、ワークショップや施設の見学という経験から始まっている以上、見落としているものもあるだろう。しかし、私たちが重視したことは、体系的に論じることではなく、議論の「足下性」である。日常の事象として、私たち自身の足下にあるものとして〈ゴミ〉を捉え、そこから見えてきたものについて考えてみたい。

1．活動報告

●見学

日時：2008 年 7 月 25 日

場所：舞洲工場【ごみ焼却工場】（大阪市此花区）

参加者：6 名

概要：大阪市のごみ処理と施設について職員の方からレクチャー。施設内を見学。

日時：2008 年 12 月 2 日

場所：柴島浄水場（大阪市東淀川区）

参加者：4 名

概要：大阪府の浄水処理と施設について職員の方からレクチャー。施設内を見学。

●ワークショップ

日時：2008 年 11 月 9 日

場所：大阪大学基礎工学部 J 棟オレンジショップ

参加者：7 名

概要：ゴミ箱をひっくりかえして、実際にゴミに触れながら、ゴミについて考え直すことを目的に、ゴミワークと哲学カフェを実施。ゴミワークではビニールシートいっぱいに広げたゴミを観察しながらワークシートを記入。ワークシートには、ゴミの描写と「なぜゴミになったのか」とゴミの来歴を想像してもらう項目と、「もしゴミ箱に入らなかったら…」とゴミの可能性を考えてもらう項目を設けた。各自、シートに記入したことを簡単に報告し、哲学カフェのテーマは話し合いにより「再利用？」に決定。ゴミならびにリサイクルの問題について議論。

2．〈ゴミ〉から考える

2－1．労働

〈ゴミ〉について考えることは、〈労働〉について考えることにもなる。それは、〈ゴミ〉

が環境の問題であり、環境というキーワードから労働問題にアプローチできる、ということではない。そうではなく、〈ゴミ〉に対する私たちの考え方を通して〈労働〉という問題が浮かび上がってくるということである。〈ゴミ〉と〈労働〉は、ある点において繋がっている。

私たちは日々何かを捨てながら生活している。私たちの身の回りにあるものは、やがて古くなり、そしてゴミとなっていく。私たちが生活するということは、必ずなんらかのゴミを出すということであり、仮にそのゴミがリサイクルに回されたとしても、やがてそれもゴミになる。何かが生産され、消費され、ゴミとなる流れは、一時的に向きを変えることはあっても、基本的にそれは一方向的な流れである。私たちの生活を取り巻く社会、あるいは産業の仕組みがすでにゴミを出す構造をしており、その意味で、私たちは〈ゴミ〉という事柄に、なんらかの仕方で関与している。つまり〈ゴミ〉を私たちの生活から切り離して考えることはできない。そして、その生活に深くかかわる〈ゴミ〉を考えることと切り離せない事柄の一つとして〈労働〉がある。つまり、ゴミにはつねに労働という事柄が貼り付いており、この〈ゴミ〉と〈労働〉のかかわりには二つの側面がある。一つ目としてあげられるのが、私たちの生活がゴミにかかわる労働に支えられているということ。そして二つ目としてあげられるのが、ゴミが私たちの労働観を映し出すという意味でのかかわりである。どういうことであろうか。

日々の生活において、そしてゴミを捨てる場面において、私たちはゴミを捨てること、つまりそれを自分たちの前から見えなくすることに熱心である。私たちは家で食事をし、掃除をし、ゴミ収集日にゴミを出す。仕事や学校から帰ってくる頃にはそれらはなくなっている。またファーストフード店に行き、一定の時間を過ごし、ハンバーガーの包み紙やジュースのカップなどをゴミ箱に捨て、店を後にする。その際、ゴミ箱が溢れていたら少し不愉快な思いをする。また、ある人はゴミ拾いのボランティアに参加し、一生懸命にゴミを拾い、集まったゴミは業者に任せ、少しいい気持ちになる。それらのゴミは焼却場に運ばれ、処理され、処理しきれなかったものはどこかに埋められる。ゴミは私たちの手を離れると、誰かが処理してくれるだろうという期待のもとに、自分たちからは見えないところにもって行かれる。私たちはそうした状況をあまりに当然視しており、〈ゴミ〉にかかわる労働に対して関心を向けることは少ない。私たちは日々の生活の中で、そうした私たちの期待を引き受けてくれる多くの人たちを自分たちと切り離してしまっている。ただ、それでも社会は何事もなく動いている。

そして、こうした〈ゴミ〉に対する変な期待と無関心は、そのまま私たちの労働観、つまり仕事に対する考え方にも反映している。最初に触れたことにも重なるが、私たちの社会、あるいは産業の仕組みは、生産つまり何かを産み出すことに価値を置いている。モノは使用あるいは利用され、消費されることによって意味をもつ。そして、私たちが働くことにも似た側面がある。私たちは働くことにおいて、モノや情報を産み出すことにかかわりたいと願い、クリエイティブであることをもてはやしている。そこで産み出されたものが、どのように消費され、その後どういう道筋を辿るのかについてはそれほど注目されない。また、私たちはそれらの仕組みに乗っている自分自身に対しても、社会に対する使用価値や利用価値という視点から目を向けてしまっている。そしてそうした考え方を支えているのは、働けなくなった際にセーフティネットが張ってあるであろう、あるいは誰かがすくい取ってくれるであろうという期待である。それゆえ、そうしたセーフティネットがうまく機能しないことは、私たちにとって大きな問題になる。たとえば最近取りざたされることの多い「派遣切り」やホームレスの問題などはそうした問題なのかもしれない。企業は自らの事情で解雇したとしても、その後ろで社会ないし国がなんとかしてくれるだろうと考え、それを知らされた私たちも「なんとかなるのではないか」という根拠のない期待以上の関心は示さない。結局、解雇された人たちに対してセーフティネットは機能せず、何の手も差しのべられないままに社会に放り出されているという現状がある。

話を〈ゴミ〉に戻すと、ゴミは生産—消費—処理の関係がうまくいっているときにはあまり問題にはならない。言い換えると、それはあくまで使い終わったもの、役目を終えたものであり、ゴミではないと言えるかもしれない。何かがゴミになるのは、私たちの手元から離れ、その離れたものの行方に無関心になるときである。さらに、私たちの消費のスピードに対して処理が追いついていないとき、つまり産み出すものと処理するものとの関係が崩れたときに〈ゴミ〉が問題として現れると言えるであろう。

ここまで、〈ゴミ〉にかかわる労働が私たちの生活を下支えしているということと、〈ゴミ〉について考えることが私たちの〈労働〉、つまり働くことを考えることになるという点から〈ゴミ〉と〈労働〉とのかかわりについて考えてきた。しかし〈ゴミ〉について考えることは、労働以外の事柄においても、私たちの考え方の枠組みを映し出す視点を提示するといえる。

２－２．メタファー

私たちは普段ゴミという言葉をなにげなく使うが、以下ではゴミがメタファーとして用いられる場合に注目して考察を行う。

まず、私たちはどのように「メタファーとしてのゴミ」を使用しているかを考えてみよう。すぐに思いつくのは、「社会のゴミ」や「人間のクズ」といった使い方である。このメタファーは、対象となる人物がある範囲において価値を持たないことや、周囲に悪影響を及ぼしていることなどを意味しているが、彼または彼女を「排除」しようとする、行為としての側面も有している。また、「粗大ゴミ」もメタファーとして使われることがある。サラリーマンの父親が休日にテレビを見て寝ころんでいる、そうした姿を母親は「粗大ゴミ」と形容するかもしれない。このメタファーは、父親が空間を占拠していること、あるいは家族サービスをしてほしいという期待に応えてくれないことへの非難を表している。母親はゴミという言葉を用いることで、父親を厄介者として扱うわけだが、これは家族間のコミュニケーションの一環であるから、程度の軽い「排除」といえる。ここまで「メタファーとしてのゴミ」を見たところでは、私たちはゴミに対して無用なもの、邪魔なものといったイメージを持っており、それゆえにゴミを遠ざけたいと願っていることがうかがえる。私たちは「メタファーとしてのゴミ」を使用するとき、対象について表現するだけでなく、同時にその「排除」を企図している。

ここで、私たちは他人からゴミだと言われるとたじろいでしまうが、この「排除」の仕組みについて立ち入って検討することで、その理由を見いだすことができるように思われる。もともとゴミとしてあるものはなく、あるものについて誰かが不要だと判断することでゴミが生まれる。ゴミはいつでも「捨てられた」ものであり、それを捨てた人間より低い地位に置かれている。私たちは他人にゴミだと言われるとき、無用なもの、邪魔なものとして中傷されるだけでなく、一方的に低い地位に置かれる。一旦ゴミだと言われてこのような立場の差があらわれると、それを回復させることは困難であり、言われた側は反論しがたい。そのようにして、言われた側はますます不利な形勢に追い込まれていく。この二重の苦痛は、人間を否定的に評価する言葉のなかでも、「メタファーとしてのゴミ」が有する特別の効果であり、それが私たちを動揺させ、ときに思考を停止させるほどの猛威を振るうのではないだろうか。

以上では「メタファーとしてのゴミ」について考察を行い、コミュニケーションにおい

てゴミという言葉が持ちだされることで、私たちと他人のあいだには「立場の差」が生じることを確認した。このコミュニケーションのねじれは、ゴミを言葉として用いるときだけでなく、私たちが実際のゴミを介して他人とかかわるとき、とりわけゴミを捨てるときにも生じている。私たちがゴミをためらいなく捨てることができるのは、それを他人が処理することを当然のように考えているからである。ゴミを捨てることは、なにかを消去することではなく、それを周囲から「排除」することであり、そうして捨てられたものの多くは他人に引き渡されている。このように、ゴミを捨てるという行為を、ゴミを介した他人とのかかわりとして捉えたとき、私たちは他人に対して一方的に働きかけるだけで、その反応を想定していないことが浮かんでくる。ゴミを捨てるとき、私たちは自分を他人に優先させており、ここでも「立場の差」が見てとれる。

これまでに見てきたように、「メタファーとしてのゴミ」にかぎらず、ゴミをめぐるコミュニケーションは、多くの場合に非対称的である。ゴミは私たちと他人の中間にあって、その関係を遮断している。こうして、ゴミについて考えることで、私たちは他人とのコミュニケーションのあり方について見なおすことができる。

２－３．感情

今回のワークショップ及びその後の哲学カフェにおいて、〈ゴミ〉からは視覚的にも嗅覚的にも嫌悪感が引き起こされるとの発言が多くなされた。たしかに、〈ゴミ〉から感情を考える場合、誰もがまず嫌悪感を挙げるであろう。破れたゴミ袋からのぞく残飯、ゴミが溢れたゴミ箱、終電近くのホームで見る吐瀉物・・・。このようなゴミのある光景、あるいはこのような光景のイメージにわれわれは嫌悪感を抱く。

心理学では、このような嫌悪感を基本情動と呼ばれるものの一つとして説明する。基本情動とは、例えば苦いものを食べると顔がしかめっ面になるというように、私たちがその感情を意識する以前に身体的な変化として表出する感情である。たしかに、先に挙げたようなゴミのある光景を見て、私たちは考えるより先に顔を背けてしまう。いわば「身体に近い感情」である。それは、私たちに危険を察知させ、身体的な反応をいち早くもたらすという役割を担うものである。そしてゴミへの嫌悪感は、私たちにゴミの不衛生さという危険を知らせ、それを回避行動させるのであろう。

さらにワークショップ後の議論では、視覚的な要素よりも嗅覚的な要素の方がゴミへの

嫌悪感をより強く引き起こすのではないか、という発言がなされた。ある人は「アイスクリーム屋でアルバイトをしていたとき、ゴミは全て甘いアイスクリームのにおいだった。トイレ掃除以外の掃除やゴミ集めは嫌ではなかった。」と発言した。アイスクリームの甘いにおいは、化学合成されたバニラ香料によるものであるが、この場面では甘いにおいでゴミの臭いが隠れることによって嫌悪感はなくなっている。つまり、ここではゴミであるにもかかわらず、嗅覚的には甘いにおいがするので、たとえ、お店のゴミ箱の中が視覚的に雑多で汚かったとしても、ゴミに感じる不快さは明らかに軽減されている。

また、私たちのまわりには、脱臭剤、消臭剤、芳香剤など、私たちと〈ゴミ〉との関係性の中で「臭い」の隠蔽を企図してつくられたものもある。本来「嫌悪感」を持つべきであろう不衛生な状況を根絶するのではなく、ただ臭いを隠蔽することを目的とし、そうした状況から私たちの目を背けさせる。このことは、私たちが〈ゴミ〉から感得すべきものを隠すことにもなる。似た状況は私たちが朝ゴミを出す光景にもある。私たちは家庭で出た〈ゴミ〉の腐臭を「臭い」として感じることはほとんどない。〈ゴミ〉は腐敗が進む前に密閉されたゴミ袋に入れられ、ゴミ収集車によって運ばれ、清掃工場で処理される。われわれは、そのシステムを理解していても、〈ゴミ〉の臭気を追うことで清掃工場に辿り着くことはできない。そのようにゴミが隔離されることによって街は「臭い」が充満することはない。すなわち、一方で、私たちはゴミの臭いを生活のさまざまな場面で隠蔽し、他方で、私たちの目の届かないところに隔離し、処理する。

しかし、こうした私たちを取り巻く社会やそのシステム、すなわち本来あるべき「臭い」を隠蔽し、不衛生な状況を隔離するシステムをそのまま受け入れてしまっていいのだろうか。人間が生まれながら身につけている能力としての嫌悪感が詐取されたことに対する違和感が残る。こうした状況をあらためて反省することによって、感情をはじめとする私たちが見落としていたことが見えてくる可能性があるのではないだろうか。

3．〈ゴミ〉を考える

3－1．ゴミになるもの・ならないもの

〈ゴミになる／ゴミにならない〉〈ゴミである／ゴミでない〉ということは、どのように区別されるのか。ゴミとしては、まず「壊れたもの」や「（機能が）働かないもの」「（役目を）果たし終わったもの」が思い浮かぶが、それだけが〈ゴミである〉〈ゴミになる〉理由な

のであろうか。

たとえば、「流行遅れ」という理由で、まだ使えるのに、そして、まだ気に入っているのにゴミになってしまうものもあれば、「流行の復活」によってゴミでなくなるものもある。あるいは「レアなもの」は捨てられない、ということもある。この場合は、その「稀少さ」が「価値」となったことがゴミになるかどうかの基準となっている。この「流行」と「稀少さ」は、「皆がどのようなものをもっているのか」という社会のなかでの状況や関係性が〈ゴミになる〉理由になっていると言うことができるだろう。

また、ものを手に入れる仕方も〈ゴミになる／ならない〉に大きく関わっている。自分で選択して入手したものは捨てにくいが、勝手に送りつけられてきた広告や宣伝は何の迷いもなく捨てやすい。わざわざ拾ったものや、「拾う」という感覚で買ったものを捨てることは少ないだろう。

これとは別に、ゴミになりにくい理由がものにある場合もあるだろう。名刺はその一例である。固有名、特に自分との個人的な関わりがある人の名前がついているものは、なかなか捨てがたい。個人的な関わりがなくても「私が作りました」というようなメッセージの付いたものもゴミにしにくい場合もある。これは、ものが人をとらえているようにも見えるが、しかし、（名前や文字など）ものを介した「関係」が人に絡みついているのだ。この「関係」から身を振り解きたくなったとき、それは、瞬時にゴミとなるだろう。

３－２．快適さと秩序

ゴミを論じるに当たって、「快適さ」は重要な問題である。この節では、ゴミと快適さの関係を、「秩序／無秩序」という観点から考察してゆく。

想像してみよう。ある部屋の中にあなたはいて、所々にゴミが落ちている。あなたはどういう心理状態にあるだろうか。恐らく、不快に感じるだろう。そこであなたは思い立って、落ちているゴミをゴミ箱に捨てることにする。目の前からゴミがなくなると、あなたの心理状態は掃除する前と比べて快適になるだろう。

ただし、ゴミは目の前から見えなくなっただけで、完全になくなったわけではない。それはゴミ箱の中に入っている。すなわち、私たちの快適さは、ゴミを所定の場所に「隔離」することによって得られている。気が進まないかもしれないが、今度はゴミ箱の中を想像

してみよう。例えば、ポテトチップスのクズを捨てたとする。クズはゴミ箱の中に散乱し、他のゴミにも降りかかる。また、飲みかけのコーヒーの入った紙コップを捨てたとする。コーヒーは他のゴミを濡らしてゆく。ゴミ箱の中は、人の手を離れた無秩序状態である。そこではゴミ同士が、さらにお互いを汚しあう。

これが、ゴミ箱のような閉鎖空間であるなら問題にはならない。しかし、それが開放された空間にあったらどうなるだろうか。例えば、ポテトチップスのクズが道端に落ちていたら、そのクズは風などによって、当初捨てられた場所を中心とした一定の範囲に汚れを撒き散らす。

何かをゴミとして捨てることは、それを自分の制御範囲外に置くこと、無秩序状態に置くことに他ならない。捨てられたゴミはなくなるわけではない。どこか他の場所に移動するだけである。そこで無秩序状態に置かれるゴミは、自らを撒き散らし、人にはそれが「汚れ」と認識される。ゴミが無秩序状態にある場所が閉鎖空間であれば問題はないが、開放空間、特に他の人がそこに訪れ、拡散するゴミによって汚される危険性がある空間であれば、それは問題である。

人は快適さを手に入れるため、ゴミを目の前から遠ざける。しかしそれは同時に、ゴミを無秩序状態に置き、ゴミの移動先での汚れの拡散を放置することでもある。私たちはそのことをもう少し意識した方が良いのではないだろうか。

３－３．「Re」を考えなおす

「Re」という接頭辞はリユースやリサイクルといったように環境問題を語るうえで欠かせない、そして馴染みのあるキーワードである。そして通常「ゴミになろうとしているソレはまだ使えないか、リサイクルできないか」という考えのもとに使用される。この場合、できるなら捨てて新しいものと入れ替えたいという気持ちがある。しかし地球の資源には限りがあるため、まだ使えるものはリユース・リサイクルしなければならない。このような「Re」の画一的な捉え方を見直してみたい。

「古着はリサイクルである」と言うとちょっとした違和感がある。なぜなら古着には「お古」という意味以上に、古いからこそ価値を持つ側面があるからである。古着が好きな人はまったく同じ型番の新品のジーンズに興味を持たないことがあるだろう。

また有名野球選手の練習用ユニフォームは高値で取り引きされる。お古・中古であり、

スポーツ用品店で同じデザインの新品のユニフォームが買えるケースがあるにも関わらずである。以前の所有者が誰か、というのが大きな意味を持つ。以前の所有者が有名人であったり、自らが好む人であったりすると、「Re」されたものであるからこその付加価値がある。

以上二つの例は新品に対する中古という通常の「Re」ではなく、「Re」されることが積極的な価値を持つケースである。ものそのものは「Re」されたものであっても、それを手に入れた人にとっては、古着は「新しい服」であり、野球選手のユニフォームは汚すことのできないもののように扱われる。

「Re」は必ず所有者の歴史とともにある。かつての所有者によって手放されたものを「Re」しようとする時、私たちはそれが擦り減っていて中古だからという以上に、ものが持つそれまで誰かによって所有された歴史をさえぎって使うことの強引さのようなものに抵抗を覚えることがある。再使用・再利用において私たちがそのような違和感を持つのは例えば臓器である。臓器移植に使われる臓器はどこかから湧いてきたようなものではなく、ある人が最も「強く所有」していたものである。だからこそ再利用が可能かどうかという〈ものの視点〉だけでなく、臓器の所有者やその家族の意向という〈人の視点〉を私たちは重視するのである。

私たちが「Re」を論じる際、ともすれば〈ものの視点〉ばかりに注目してしまいがちだが、このように〈人の視点〉に基づくことによって、リユースやリサイクルを問い直すことができるかもしれない。

3－4．「捨てる」ということ

あるものを捨てる。

その時に捨てられるのは、ものだけではないだろう。つまり、ものが捨てられてしまうことで、それが潜在的に使われる可能性そのものも捨てられてしまうと考えることができる。この可能性を何らかの仕方で生かそうとすること、それが、リサイクルであり、リユースである。リサイクルやリユースができないゴミは、できるだけリデュースする（減らす）ことが望まれる。

この考え方からすれば、「捨てる」ということは、できるだけ行わない方が「よい」のである。したがって、「捨てる」ことには、マイナスあるいは消極的な意義しかないとい

うこともできるであろう（もちろんこの考え方には、ゴミ廃棄場やゴミ処理の限度や限界という問題も関わっている）。

しかし、「捨てる」ということには、このような消極的な意義しかないのであろうか？「捨てる」ことの積極的・能動的な意味が見いだされる行為もあるだろう。たとえば昔付き合っていた人からもらった指輪をどうするか。別れて不要となったこの指輪を質屋に持って行けば、誰かがこれを再び使用することになる。けれどもこれは自分で買ったアクセサリーが時代遅れになったからという理由で質屋に入れるのとは、手放すことの意味合いが違うのである。私たちはものをゴミ箱に入れる、人に譲るなどしてものを手放す時、その行為に固有の意味を持たせるケースがある。ある指輪はどうしても海に投げ捨てられなければならないのだ。

このように考えてみると、「ものの潜在的可能性を捨てる」として「捨てる」を考える立場（「捨てる」ことの消極的な意義）は、ものの使用や利用などの物理的・物体的な特性に関わっており、それゆえに（ある程度の）一般化が可能であると言えるであろう。だが私たちは、ものに対して、使用や利用などの機能的側面だけではなく、ものに関する／まつわる「意味」や「関係」などの個人的な文脈においても関わっているのだ。それに応じて「捨てる」という行為も、時として積極的な意義を持つのである。

３－５．名もなきゴミ

私たち環境分科会が実施したゴミを扱ったワークショップでは、各自が三つまでゴミを選びその来歴を想像した。参加者が選んだのは例えばぬいぐるみ・雑誌・はさみである。一方参加者が選ばなかったゴミは、鼻をかんだティッシュ・段ボールなどであった。なぜ参加者は鼻をかんだティッシュや段ボールを選ばなかったのか。考えられる理由を四つ挙げてみたい。

一つ目の理由は、見た目が汚い、臭いからである。この理由は特に生ゴミにあてはまる。ワークの冒頭で、袋からゴミを出す際に強烈な臭いを放っていた生ゴミは、すぐさま袋に詰められ部屋の隅に「隔離」された。私たちは汚いもの、臭いものはすぐに捨ててしまうが、捨てられたゴミをテーマに何かを語ろうとする時も、同じようにそれらを知らずのうちに遠ざけてしまっているのである。

二つ目の理由は、同種のものが多く、目を惹かなかったであろうからだ。参加者が三つ

のゴミを選ぶ際、まず全てのゴミを分別し始めた。「雑誌」「電器」「包装」「プラスチック」「金属」といったように。ぬいぐるみ・はさみは一つしかなかったし、雑誌は似たような複数の冊子から内容の違いを見比べて選択できた。一方、鼻をかんだティッシュや段ボールは似たようなものが何個もあり、特定の一個を他と見比べて明確な理由で選ぶことは不可能であった。雑多なもののひとつひとつに私たちは注目しない。

三つ目の理由は、かつての所有者の情報がなかなか出てこないからだ。このワークの目的はゴミの来歴を想像することであったので、かつての所有者が思い浮かばないゴミに注意が払われることはない。雑誌からはかつての所有者を嗜好や年齢層などの点で思い浮かべることができるが、鼻をかんだティッシュからはそのような「個人」を思い浮かべにくい。

四つ目の理由は、鼻をかんだティッシュは「誰から見てもゴミとしか考えられないもの」であり、段ボールは「業者が回収して再利用することが当たり前に思われるもの」であるからだ。処分するにあたり、所有者独自の判断はほとんど働かない。一方、ぬいぐるみは自分の考えで処分できる。誰にあげるのか、捨てるのかという、ものの行き先を自分で選択できる。

参加者が選んだぬいぐるみ・雑誌・はさみを「名のあるゴミ」と呼ぶならば、選ばなかった鼻をかんだティッシュ・段ボールを「名もなきゴミ」と呼べるだろう。「名もなきゴミ」は、その汚さ・特徴のなさ・処分に対する裁量のなさゆえに注目されず、名を付ける必要がないし、また名を付けることが難しい。

日常で私たちが産出するゴミは、「名のあるゴミ」より、むしろこれら「名もなきゴミ」の方が多い。自分が出しているのに関心を持ちにくい「名もなきゴミ」。これらをもっと意識化して検討する必要があるだろう。

3－6．メディアとしてのゴミ

私たちが〈ゴミ〉について論じてゆくとき、多くの場合、〈ゴミ〉は「解決すべき問題」として捉えられる。だが、他の捉え方も可能ではないだろうか。ここでは、〈ゴミ〉の「コミュニケーションのメディア」としての側面について、考察する。

NPO や地域の自治会がゴミ拾いのボランティアを行う場面を考えてみよう。ボランティアによるゴミ収集の効率は、さほど高いわけではない。単に「ゴミをなくす」という形での「問題解決」のみを目標としているのならば、業者に依頼したほうが効率的である。

それにも関わらず、彼らは自分たちの手でゴミを拾おうとする。その理由は何であろうか。

彼らが集まってゴミ拾いをするとき、そこでは何が起こっているだろうか。もちろん、落ちているゴミは減少していく。しかし、そこで起こっていることは、それだけではない。ゴミ拾いに集まった人々は、ゴミ拾いという「現場」において「出会う」のだ。ゴミ拾いというきっかけがなかったならば、彼らは出会うことはなかったかもしれない。ゴミ拾いによって、新たな出会いが生まれ、新たなコミュニケーションが生まれる。

〈ゴミ〉がこのように新たな出会いを生むのはなぜだろうか。その理由のひとつは、〈ゴミ〉がいろいろな人にとっての共通の問題になりえることにある。ゴミは時に、公共空間に放置される。そのとき、その公共空間を通過する人々の多くは、そのゴミに対して不快感を覚える。結果として、〈ゴミ〉は彼らにとっての「共通の問題」となる。このことがそのゴミの存在を問題視する人々の連帯を促し、結果として彼らの出会いを引き起こす。

ゴミ拾いに集まる人々にとって、当初の目的は確かに、落ちているゴミの減少という形での「問題解決」かもしれない。しかし結果として、「新しい出会い」や「新しいコミュニケーション」という副産物が生じる。〈ゴミ〉の新たな意味がここに現れてくる。〈ゴミ〉は「解決すべき問題」という意味のみならず、「コミュニケーションのメディア」という意味でも考えることができるのである。

4．結びに代えて

以上が、今年度、環境分科会の活動の成果としてまとめたワーキングペーパーである。私たちが最初に述べたように「〈ゴミ〉は臨床哲学で扱うテーマである」ということが示せたかどうかは、これを読み終えた方々のご意見を待たなければならないが、〈ゴミ〉そのもの、つまり「〈ゴミ〉から／を考えること」のもつ広がりや豊かさといったものが、ある程度示せたのではないか、と考えている。

このワーキングペーパーを書くにあたって、環境分科会がこだわったのは「共同執筆」であるということである。お気づきかもしれないが、このワーキングペーパーにおいては、担当や文責という形で、誰がどの部分を書いたのかを示していない。その理由は、テーマの担当を決め、それを担当者が分担し、最後に合体させるということあれば、できあがったものは「単に各人の考えを寄せ集めたものにすぎなくなるのではないか」「果たしてそれで共同執筆と言えるのか」と考えたからである。それゆえ、私たちは、執筆にあたって、

まずあらかじめ内容として盛り込む必要のあるテーマをワークショップ後の議論などをふまえた上で決定し、誰が担当するかは「あみだくじ」で決めた。そして、そのテーマについて、どういう内容にするのかを全員で議論し、その議論をふまえた上で、担当者が「たたき台」をつくり、その内容について、さらに議論し、修正した。その過程における、私たちの基本的なスタンスは、担当者が考えたことを書くのではなく、全員で議論したことを書くということにある。もちろん、内容を膨らませるために、各人の裁量にまかせ書き足した部分もあるにはある。しかし、それもあくまで「たたき台」として扱い、他のメンバーの合意がとれない場合には、各人の思い入れがある部分に関しても、議論した上で、大幅に手を加えた。以上の過程からもわかる通り、このワーキングペーパーは、私たちが議論に議論を重ねて作り上げた成果である。

今年度の後期は、分科会の数が少なかった（後期６回）ために、授業外に集まらざるをえず、環境分科会にとっては、かなりのオーバーワークになってしまった。にもかかわらず、私たちが共同執筆ということにこだわったのは、これまで臨床哲学の中で試みられてきた、ワーキングペーパーや共著論文とは異なる「書き方」をしてみたかったからである。読み手に対して、こうした意気込みがどこまで伝わり、またこの試みがどのように評価されるのかはわからないが、ワーキングペーパー執筆の背景として紹介しておく。

最後に、内容に関しては、さまざまな意見があると思われる。事実、私たちが読み返しても不十分に思われる点が多々ある。しかし、この文章はワーキングペーパーという性格上、まだ途中段階のものである。さまざまなご指摘をいただければと思う。今後もそうした指摘を取り入れながら、ワーキングペーパーの内容をより豊かなものにしていければ、と考えている。